

紹介

● 現代史觀 文學博士 三浦周行著

現代國民の文化的生活は其過去に於ける訓練や努力に負ふ所が多いと言ふ見地から、「史家より觀たる大正時代」「東西文明の調和と不調和」の如き現代社會の推移を語るもの及び、「皇太子御成年式」「皇太子の攝政につきて」「原首相の暗殺につきて」等の、現時の出來事を歴史的に觀察したものを第一編現代史觀として收め、「日本國體論」「國體と佛教」「デモクラシーと日本國民性」「文化の下剋上」「昔の商業と商業道德」等國民性や國體を對象として論究したものを第二編國體國民性とし、第三編史傳史話は、明治大正時代の人物を主とした「嗚呼皇太后陛下」「栗田寛先生」「五代友厚翁」や、折り觸れて追懐し、追慕された傳教大師や法然上人の史傳の外に、「國史の教育と社會問題」「文化史とは何ぞ」と言つた風の史話も含めて居る。著書も其卷頭言に記された通り、もこより専門研究の副産物であるけれども、過去の事象にのみ没頭して現代社會

相に無關心となり勝ちな歴史家が、日常吾人の生活に最も關係深く且最も興味を惹くべき出來事を、著者獨特の深遠なる史鏡にかけて解剖もしたり、批評も加へたりして、現代社會に觸れんと試みられたものである。(四六版五〇六頁、古今書院發行、定價三、二〇)(中村)

● 支那民俗誌上卷 永尾龍造著

本書は支那文化叢書の第一篇として滿洲考古學會並に滿蒙文化協會より出版せられたるものにして、其の大半は嘗て雜誌『滿蒙之文化』に掲載せられたるものなり、支那年中行事都てを纏めむとするは著者の宿志なるも、取り敢へず其の正月の部のみを纏めたるもの即ち本書にして上篇春立つ頃、中篇年の始め、下篇元宵の祭りの三篇に分ち、更に各篇を三章に分ち、又各節各項を分ちて立春の儀式、春牛、芒神、迷信、竈祭り、除夜、財神賣り、押歳錢、宮中の歳末、桃符、柳の魔除け、春聯、門神、鍾馗、門松、封印、爆竹、元旦雜俎、小年朝、接路頭、星祭り、燈節、藍九節等の諸風俗を評記し、處々其の史的沿革を論じ、外篇には蒙相の正月風俗十二節も附す、跳鬼以下の五枚の口繪、千張紙